

2025 年度 大阪公立大学個別学力検査(一般選抜 後期日程)

小論文 文学部 「解答例・出題の意図」

解答例

第 1 問

この期間のビルは、他の依存症者に対して自分の無力さの自覚を語るのに、上から下へ恵みを施すといった、いわば説教者が信徒に対するような態度で接していた。つまり、ビルは、自分の力を行使して、他の依存症者を支配することによって、自分の徹底的な無力の自覚を伝えようとしていたと考えられる。ここには無力な者が支配するという自己矛盾がある。だから、彼の試みは、失敗することが避けられなかったのである。(193 字)

第 2 問

ビルはアルコール依存症を克服するために、自分が飲酒をコントロールできないという徹底的な無力を自覚し、飲酒問題を自力で解決することを放棄して、その解決を、自分を越えた大きな力に全面的に委ねた。こうした自分の無力さの強い自覚と、自分の運命を超越的な力に委ねる態度を、著者は「純粋な靈性」と呼ぶ。しかしこの無力さは、一度自覚すれば十分なのではなく、繰り返し表現し直されなければならない。ビルはこの表現を、自分が助かるために自分の体験をもう一人の依存症者に語るという利己的態度によって実行した。だからビルの利己的態度は、自分の無力の自覚という純粋な靈性をたえず繰り返し表現する手段にほかならないのである。(298 字)

第 3 問

ビルが自分のアルコール依存症を克服するために、自分以外のアルコール依存症者を必要とした理由は、自分がアルコールに対して無力であることを徹底的に自覚する上で、この自覚を繰り返し表現し続ける必要があったからだ、と問題文では説明されていた。だとすれば、彼に必要なのは、表現し続けるという自分自身の行為であって、相手がアルコール依存症者であることは必ずしも不可欠の条件ではない、と考えられる。そう考えるなら、例えばアルコール以外のものに対する依存症を克服しようと苦心している人を相手に、自身のアルコール依存症体験を語るという試みにも克服につながる可能性があるだろう。現代社会ではアルコール依存以外にも、麻薬などの薬物依存、スマートフォン依存、タバコ依存など、さまざまな依存症によって健康な生活を破壊されて苦しんでいる人たちが増えているとされる。こうした人たちは、依存の対象は違っていても、共通する精神的メカニズムによって依存から離れられない状態に陥っていると考えられる。とすれば、こういう人たちを相手に自身のアルコール依存とその克服の過程を表現し続けることは、有効な依存症克服の手段となりうるだろう。(496 字)

出題の意図

第 3 問

問題文は、単に論理的に論旨を語るというだけでなく、アルコール依存症の克服という実際の人生の上で重大な意味をもつ問題について、独特の見解も提示している。それに対する出題の意図は大きく二つある。まず、問題文自体の中ではまったく想定されていない問題に直面した時に、論旨に沿ってそれをどう解決するかを考えさせることで、受験者自身の主張を論理的に展開する能力を評価することである。次に、その主張をもとに、実際の人生に直結する現実的な問題について、受験者が独自の意見をどの程度説得的に主張できるか、その能力を評価したいと考えた。